

サオウぱい
らふい娘
と
してみませんか？

立ち読み版

小説 089タロー
挿絵 もふりる



序章	サムライ娘は超巨乳！	006
第一章	サムライ娘のオッパイ修行！	031
第二章	サムライ娘のバージンご奉仕！	072
第三章	サムライ娘の発情エッチ！	117
第四章	サムライ娘はエッチな修行中！	153
第五章	サムライ娘はカレにくびったけ	190
終章	サムライ娘はアナタのものっ！	243

登場人物紹介

Characters



さおとめ さくや
早乙女朔耶

武家の娘で、厳しく育てられているものの箱入り娘でもある。剣の道を究めようと日々励んでいるサムライ娘。並外れた自分の爆乳を疎ましく思っている。



みねうちとう ま
峰打刀磨

平凡な学生少年。剣道師範を父に持ち、腕前は剣道部主将よりも上だが、幼少から剣道ばかりやってきたためややうんざりしている。

（そんな。無理して僕の言うこと信じちゃうなんて）

明らかに強がりなくせに、本当は泣きそうなくらい恥ずかしいくせに、自分の弱点を克服したいからと裸の胸を突き出す彼女。その考え方には呆れたものの、どこまでも爆乳を毛嫌いする言動に少年はまたもかわいそうになってきた。

「朔耶……情けなくなんて、ない。ぜったいしない！ ごめんだけど、と……とつても、キレイだよ……！」

「——っえ？ ま、またそんなことっ。わたし、無様だとずっと思っ……同じ女子にも見せられなくて……」

少年は誠意を込めて、ゆっくりと彼女に覆い被さって優しく視線を合わせてあげる。彼女もまた、とうとう見られた生の乳房を本気で褒められて頬を染める。

「無様じゃないよ。こんなキレイなおっぱい、見たことないよ」

生唾を何度も飲み込みながら刀磨は感嘆のため息を零した。

朔耶の乳房は本当に美しく、実に形よい釣鐘型だった。巨乳は型崩れしやすいが仰向けでもほとんど潰れてなくて、まさに張りのある瑞々しいもぎたて果実みだった。さらに乳首は消えそうなほどの薄桃色で、乳輪も小さくて愛らしい。若干陥没っぽい跡も見えたが、今は先端が小さく尖ってちよっぴりエッチな雰囲気もあった。

（こんなステキな巨乳なのにコンプレックスだったなんて。だから余計に弱くなっちゃったのかも。治してあげたい、朔耶を……）

自分は奥手。そう思ってきた刀磨だったが、気がつけば彼女に夢中になって奇妙に積極的になっていた。これが恋心なのかと、自分でも驚く。

「だから、自信を持って、ね？ それに誰がなんて言っただって、僕は、す、好きだよ。朔耶のおっぱい」

「っ！ ……そ、そんな、刀磨、殿……し、真剣な顔で、す……好き、なんて……っ」

思わぬ少年の熱意と視線に、少女はますます瞳を潤ませ当惑の色を深めていく。傍から見ればレイプ直前の姿。けれど彼がそんな男でないことを、朔耶は本能的に分かっていた。だからだろう。初心な乙女は恥ずかしそうに視線を背けたものの、それでも乳房を隠そうとはしなかった。むしろ少し、ほんの少しだけ口元を緩めて、

「そう、か……わたしの胸、好き、か……ふふっ」

と、ちよつぱり嬉しそうに小さく微笑んでくれた。

（うわあ。朔耶の笑顔、すつごく柔らかい感じ。こういう顔、初めて見たかも）

普段とは違った、どこか愛らしくて守ってあげたくなるような微笑。これを見ただけでも嬉しくて、少年の胸にも暖かいものがジンと沁みだ。

「じゃ、じゃあその……さ、触つても、つてか、しゅ、修行して、いい？」

「っ！ む、無論だつ。さ、さあ、たの、む……」

彼女の態度にも柔らかさが出てしっとりとした雰囲気が生まれる。名目は修行だけど、まるで初エッチに悩む童貞と処女みたいな空気だった。

震えながら手を伸ばすと、少女の喉も緊張気味にコクンと鳴る。刀磨もドキドキしながら、そつと、そおつと、豊かな膨らみに掌を重ねていた。

——ぴたっ、ぷにゆるるん……っ。

「んひゃうっ!? あ、あはあ……!!」

「ごっごめん! ぼ、僕、初めてで……!!」

触れた途端、少女の唇からつやかなソプラノが鳴り響く。少年は焦って手を浮かせた。「はあ……ああ……だ、大丈夫っ。ちよつと、痺れてしまっただけ……どうか、構わず鍛錬を……」

「う、うん、分かった」

そう、これは修行なのだ。彼女もそう言ったはず。ならば躊躇ためちわずにしっかりと痺れに慣れさせてあげるべき。そう言い訳して奮い立つと、刀磨はもう一度掌を重ね直した。

「はああっ!? あ、あはあ、んっ、と、刀磨殿おっ、て、手で、痺れ……っ!」

再びソプラノが再開されて細い首筋がピクンツ、と動く。瞳がキュツと強く閉じられ、眉間に薄い縦ジワが寄る。その可憐な表情を目に焼きつけつつ、少年は初めての乳揉み感触に心底ウツトリし始めていた。

(ああ、なんて揉み応えっ……!! 暖かくって、ふわふわしてて……!!)

あまりにも肉感的な彼女の乳房は、まるでタツプリと果肉の詰まった極上の大玉スイカみたいだった。なのに乳房は蕩けそうなほど柔らかくって、触れるだけでも指が沈み込ん

でしまうほど。肌もしつとりと汗ばんでいて吸い付くみたいで気持ちいい。

しかもゆつたりと刺激すると、まだ触れてない先端の突起、薄桃乳首がもつと硬化していくみたい。これがまた美味しそうな色とつやで、まるで甘美なサクランボみたいだった。

「あああ、凄いいっぱい……ど、どう朔耶？ な、慣れてきそう？」

「はあ……はあ……わ、わから、ないいつ。し、痺れてきて、あんっ、ピリっしてきてえ……力、抜けちゃう……！」

まだ特訓の成果はないらしく、朔耶は両脇をギュッと閉じて細かく胸を震わせている。両手でもあり余る大きな果実は、ちよつとの動きでもふるふる揺れて艶かしい。

（つていか朔耶、ほんとはいつもこんな風に感じてたんじゃ？ だから負けちゃう？）

やはりこの乳房は相当敏感らしかった。童貞な刀磨は強くはできず、こわごとと外周を撫でているだけ。なのに肩は逐一反応し、肌もみるみる淡い桜色になっていく。そして首筋は悩ましく振れ、腰も身動きし、長い睫毛もピクピクと震えていくのだ。

いくら刀磨でも、これが苦悶の姿だとは思えない。太腿までモジモジさせてあつ……と甘い鼻声を漏らすところも、いわゆる女の官能の仕草にしか見えなかった。

「あの、朔耶？ もしかして……き、気持ち、いいの？」

これは一度はつきりさせた方がいいかもしれない。そう思つて、思いきつて聞いてみる少年。

すると少女は、はっと目を開きこちらを見ると、すぐに朱色の頬を背けた。

「っつ!! な、なにをいうのだっ……!! べ、別に、気持ちよくなどっ。ただ、力、抜けてしまっただけで……」

「ほんとに? なんか朔耶、凄く気持ちよさそうな顔してるんだけど……」

「えっ? そ、そんな……わたし、そんな顔を?」

今度は驚いて頬に手をやる少女。どうやら自覚はなかったらしい。

これは本当に無垢だからこそ分からないのかも。そう思った刀磨はもう少し食い下がった。

「じゃ、じゃあ、こういうの、どう?」

——スス……びんっ、くりくりんっ!

「きやうんっ!! ひああだめえ、そ、そこっ、乳首いいっ?」

乙女の艶声が一際高く響き渡った。少年の指が先端の桜色を軽く引つかいたのだ。途端にバストは跳ね上がって煌めく透明な汗を散らした。

「ど、どう? これも痺れる? っていうか、いつもの痺れに似てる?」

「はあはあ、わ、分から、ない……でも……似てる、ような……」

朔耶は指を噛んで懸命に声を殺そうとする。けれど瞳はトロンとしてきてどこか気持ちよさそうだったし、肩も刺激に小さく震えてゾクツとするほど艶かしい。

（これは間違いないじゃ? 朔耶は超敏感なおっぱいなんだ。だから打たれると力抜けどちやうし、ちよつと舐めたただけであんなに弱っちやうんだ）

思えばそれらしい節はあった。最初のときだつて彼女は苦しむというよりは感じて腰砕けるみたいだった。それならまずは、これが快樂だと自覚させることから始めなければいけない気がする。そう内心で言い繕つて、刀磨はますます乳首を刺激した。

「ひああつひいいんっ！ い、いやあ、そここすつちゃ、だめえっ！ し、痺れちゃうう！」
「いいんだよ痺れて！ 痺れに——慣れなきや。それに、きつ、気持ち、よくないかな？」
「そお、そんなことつ、わたし、朔耶にはよくうっ~~~~んにやああそれだめええっつ！」
もう可愛くて堪らなかつた。彼女はどこまでも敏感らしく、乳首をピンピンと弾いてあげると腰を波打たせて身悶えてくれる。その姿はまるで、正常位でのエッチでよがっているみたいだった。

しかも彼女はこれでもなお快樂を認めようとしない。無垢な女の子を開発するよう、やつてる方はもうドキドキもの。

「はああ乳首だめえ、し、痺れるう、こ、恐いくらい、痺れちゃうう……っ！」

「あの、ほ、ほんとに、辛い？ だったらその、やめるけど……」

「あっ……そ、そん、なあ……！」

もちろん刀磨にレイプするような悪意はない。ただ彼女が素敵で、色つぼくて、ここまです素直に身を任せてくれるだけに、きちんと原因を解明したかった。

「ごめん、ごめんね朔耶。その……僕、どうしたらいい？」

ヒクヒクと身悶える彼女を覗き込み彼は最後の確認を取る。これで本当に嫌がるのなら

刀磨は本気でやめるつもりだった。

けれど……美少女の眼差しはとても切なげで、離れた指を名残惜しそうに見つめている。唇から漏れる惱ましい吐息も、どこかもどかしさのようなものを感じさせた。

そして彼女は豊満な乳房を見下ろすと、ちよつと拗ねたように。でも、物欲しそうに。脇を締めて、乳房をむにゅつ、と寄せて上げた。

「……も……もつと、してくれ……さ、最後まで、修行………し、したい……っ」

その恥ずかしげな表情。どこか観念したような、可憐で弱々しい小声のおねだり。まっすぐ見れない泣きそうな眼差しが、男心を強く心地よくくすぐっていた。

「つつつ!! ああ朔耶あつ!」

——むにゅりっ、むにゅりっ、もみもみ、ぷるるるんっつ!

「ひあああああらめえええ!! ああらめ、らめえ、も、揉むのお、揉んじゃっ、指っくくああんびりびりしちゃううううっ!!」

とうとうポニーな少女の口からはつきりと快楽の嬌声が溢れた。胸を差し出されて昂った少年、その指がしっかりと乳房を揉み始めたのだ。途端に少女の背筋がビクつき官能の昂りを全身で表した。

敏感すぎる彼女の胸は、実はこれほどの刺激を受けたことがない。そのため初めての乳揉み感覚は乳腺を熱く駆け巡って、発達しすぎた性感帯をただただ甘やかに目覚めさせてしまっていたのだ。

無論、それを知りうる刀磨ではない。けれどオッパイのふくよかな肉感、揉むともちもちと絡みつく柔らかさ、どんだん火照っていく美肌の暖かさ、それらを深く感じ取れて極上の気分を味わっていた。

「うわあ、こ、こんなに指が埋まる……！ 気持ちいい、大きいっ、朔耶のおっぱいっ！」
「いやあ、はずか、恥ずかしいっ、こんなのへん、わらし、胸え、こんな弱くう……！」
今なお理解が追いつかないのか、朔耶は唇をわななかせながらイヤイヤと首を振る。飛び散る涙はキラキラと美しく、床に広がる黒髪ポニーも天女の羽衣みたいに煌めいていた。そんな彼女が可愛くて。ゾクゾクするほど色っぽくて。刀磨は興奮のまま、ひたすら柔らかいオッパイの感触を掌と指で味わいまくった。

「はあ、はあ、朔耶、朔耶あつ……！」

「ひい、ひああ、刀っ、とうま殿おお、熱いのお、胸っ、熱いのおお……！」
豊かな双乳はモミモミと揉み込まれ、いっばい揺らされて谷間でぶつかる。刺激に背筋がピクピク跳ねて声にもますますつやが混じる。指が強まれば汗も増やされ、乳房は妖艶な光沢を放つ。

（ああ、ほんとにステキなおっぱいっ！ 揉めば揉むほど柔らかくなるっ……！）
あまりにも色っぽい姿を目にして少年の興奮も高まる一方。くるくる回る乳首も素敵でつつい指腹で優しく捏ねる。そのたびに少女は嬌声をあげて、淫らにも腰をくねくねとくねらせてくれていた。

「はあつはあつ、とうま殿お、もお、もおだめええ……！　ちく、乳首い、胸え、き、き
ちやいそおで、なんか、きちやいそおでええ……つつ！」

息も絶え絶えな朔耶の顔は、まったく快感を隠せないほどのとろつとろの蕩け顔。開いた口内には唾液が溜まってヌラヌラと妖しく輝いているし、両腕も力なく床に伸びて身悶えするたびにカタカタと鳴る。いつしかお尻まで官能にヒクつき、紺の袴をも乱してしまっていた。

「やっぱりイクんだね？　気持ちよくってイケそうなんだね!!　いいよ、イっちゃって！」
覆い被さった剣士少年は袴の前を尖らせて願う。一人の男として、女の子をきちんと最後まで悦ばせてあげたい。それだけが、唯一残っていた彼の理性だと言えた。

そして彼は、自身も唾液でグチヨグチヨの舌を、そお……つと右小粒に近づけていって。
「ん……ちゆるんつ！」

「はうううううつ!!!　あはつつらめえええええ!!」

薄桃色の勃起乳首、その根元から先端までがザラつく舌に擦られていた。途端に乙女は目を見開いて大きく腰を跳ねさせる。

が、刺激はそれで終わらない。少年はちゃんと悦ばせたくて、空いた左小粒も指先でしっかりと摘んであげると、

「あひいいいっつくああああああんんつ!!」

——びくっ！　びくびくがくがくんっ！



「はっ?! ち、違うぞ! 別に嬉しくなどっ」

思わず唇の端から漏れた、女の子らしい、しとやかな微笑。それを慌ててごまかすと、上半身裸の袴少女は自分で片方の乳房を持ち上げ、オズオズとペニスに押し当てた。

——ぶるるん、るぷりっつ……。

「んんっ! あんっ……こ、こう、か……?」

「あうっ! う……うん、それ、いいよ……」

実は少年はパイズリを求めたつもりだった。だが、そんな淫戯を知らない朔耶は乳房の一つで亀頭を擦りつけただけ。けれど彼女の豊富な乳房は柔らかくつてフカフカしていて、触れるカリにはびっくりするほど快感だった。

しかも少女は彼の反応にまた気をよくして、たわわな果実をゆったりと回していく。

「ああっ、朔耶のおっぱい……擦れると、感じる……気持ちいいっ」

「ああ、そ、そう、か。あんっ、う……嬉しい……んんっ! も、もっど、感じてくれて

……んっ、いいのだぞっ」

朔耶は甘やかな微笑を浮かべて、なおも乳房でペニスを愛撫する。柔らかな脂肪を軽く押しつけカリをむにゆりと飲み込んでみせると、張り出たエラにもちゃんと乳房で触れてあげる。

そして気持ちよさそうな彼を見ながら、身体ごと乳房をたぶたぶ揺すっていっぱい刺激してあげていた。

（ああんっ！ と、刀磨殿の逸物っ、硬くって凄いつ！ だ、だめえ、擦っていると、胸、また痺れるうう……！）

一方で彼女も、初めてのオッパイとペニスの触れ合いに思わぬ快楽を味わわされていた。彼のペニスは焼けるほど熱く、亀頭表面は薄皮がパンパンになっている。それがなめらかに乳肌を滑ると、ゾクゾクするような甘い電流が乳腺を蕩けさせてしまっそう。

しかも鈴口は粘液を出してヌルヌルと肌に塗り込んでくる。乳肌がヌメって敏感になつて、痺れがさらにまるやかなものになつていく。

「あああ、あああ、んふうう、すげい……！ やん、刀磨殿を、感じるうう。熱くって、びんびんで、あん！ もっと、痺れちゃう……！」

彼の恍惚とした表情も、見ていて凄くドキドキする。ドキドキが乳房をさらに熱くし彼の肉硬さをもっと感じられるようになってくる。

びくん、びくん、と脈打つ肉棒。その、じつくりと焼き上げてくるような心地よい媚熱に、女心まで夢中になつてしまっそうだった。

「ああ気持ちいいっ、朔耶、朔耶ああっ」

「ああ、ああ、ああ、ど、どうだ刀磨殿お、んんっ！ 悦んで、もらえるか…… いいのだ、わたしからの礼、もっと感じて……くれてええ……っ！」

いつしか朔耶は腰まで回して乳房で勃起を握ね回していた。エラの裏が弱いのか、そこを乳首で刺激すると彼の腰がビクッ！ と浮く。それが何だか嬉しくって、乳首は進んで

触れていくと、エラにぶるんつと擦り返されてウツトリするほど痺れてしまう。

(だめっ乳首弱いのっ！　だが、だがいいっ！　刀磨殿も感じてわたしも感じちゃうっ！) 少年の指摘を受けた美少女は、これがエッチな快楽だと知ってしまった。認めてしまった。おかげで嫌悪もどんどん薄れ、傷の痛みなどあつという間に忘れられる。むしろ打たれた部分こそ敏感になっていて、ペニスがそこで脈打つたびに乳肉が心地よい熱をあげる。(ど、どうしてっ？　痛かったところ、凄く、感じちゃうっ！　いや……本当に、痛かったのか？　ひよつとして、刀磨殿が言うように、わ、わたし、は……)

今にして思えば、少年の剣撃でさえ自分は快楽を得ていたのかも。そんな疑問が不意に沸いて、乙女心をグラリと揺さぶる。

そしてそれは、彼女が悦ばせた師匠によって証明されることとなった。

「ああ朔耶、朔耶ああ……もう僕、我慢できないっ！」

「っえ？　ひっ——ひっあああ刀磨どのおおおおっ！」

——ずぶりゆっ！　むちゅぶるぶぶぶ、たぶりっ！　たぶるりりんっ！

淫らな感覚に浸るのも束の間。上半身裸の爆乳少女は目を剥き仰天させられていた。何と少年は快楽のあまり、椅子から立ち上がって腰を振り立ててきたのだ。

途端に乙女のふくよかな乳房は勃起で激しくピストンされる。これまでと違う強いプッシュに火照った乳房が悲鳴をあげる。

「ひいんつきひいんっ！　はあはあ、まあ、待て、待ってえ刀磨どのおおっ！」

驚き身を引く彼女の乳房に勃起ペニスが容赦なく迫る。爆ぜそうなくらいにばんぱんの乳肉、その中心にある乳首目掛けてカリがゾプゾプと突きを繰り出す。

おかげで朔耶は腰をくねらせ、敏感乳房を何度も何度も穿たれてしまう。竹刀でも感じる柔な性感帯、その火照ったスイカップたちが淫らな抽挿にガンガン責め込まれていく。

「ひあつひああつつだめえ！ 刀磨どのお、胸つ、痺れるう！ 奥う、奥につ、ずぶずぶつてえ、ぬちゆぬちゆつてええ！」

「ごめんっ僕も痺れるう！ おちんちん痺れて、朔耶のおっぱいもつと感じてえ……っ！」
少年とて罪悪感がないではない。傷つき癒やしたばかりの乳房を本能のまま突いているのだから。

けれど——そんな少しの理性さえもが、彼女の淫らな表情と痴態に熱く心地よく押し流されていく。

「ひあつあひいつこんなああ……！ 胸え、かんじちやうのおお……やん！ 熱いのお、熱いおちんちんでつゝ溶けちやうのおおっ！」

亀頭が赤くなつた部分に刺さると声にますますつやが混じる。袴に包まれたふくよかな臀部もピクツ！ピクツ！と大きく跳ねる。快樂に緩んだ小ぶりの唇も、濡れた舌をチラつかせてイキそうなことをアピールする。

「すごいよ朔耶っ。ほんとに敏感なんだね？ おちんちんでぐりぐりされても気持ちよくなってくれるんだねっ？ 僕も気持ちいいっ！」

「ちいい、違ううう、気持ちよくなんか、気持ちよくなんかあっくくいやああんらめえキ
ちやうううっ!!」

羞恥心を刺激されて必死に首を振る朔耶。けれど乳房はあくまで正直で、刺されるたびにパウンドを繰り返し、とても気持ちよさそうに悦びの波紋を連ねてしまう。

そんな彼女が素敵すぎて、刀磨は乳房を二つとも狙うとカリでヂュプヂュプと交互に突いた。

「ああ柔らかいつ。ぷりっぷりなのに、こんなに埋まってくくくああ先っば、いっばい擦れるう!」

「いわないれええ、ひいいん言っちゃいやあああんっ! かつ感じちやうう! おちんちん熱くってくく朔耶、朔耶はああああっ!」

——づっぶづっぶぢゅっぶぢゅっぶふるんふるんふるんっ!

すっかりノった刀磨のピストンはもう誰にも止められない。他に誰もいない保健室で美少女本人が止めないのだから。

そう。もはや朔耶は彼を止めようとはしなかった。むしろ爆乳をウツトリと差し出して舌まで出して喘いでいた。

「ひいいいんもおらめええっ! 胸え、おっ、おっばいっ、あ、熱いのおお……き、キてしまおう、おっばいとお腹っ、びりびりしちやうううっ!!」

浅ましい悲鳴をあげる素顔は、もうとろつとろのいわゆるアへ顔。バストをペニスで愛



でられながら破廉恥にお尻までふりふりしている。その気になれば逃げられるのに自ら乳房を寄せて上げて、彼の突き込みを恍惚の眼差しで受け入れていく。

「はあっはあっはあっはあっ！ もうダメ、朔耶、僕もうっ〜っ〜！」

「ひいっはひいっ、わたしもお、おっぱいいい、おっぱいが、おっぱいがあああっ〜っ〜！」
弾ける爆乳も慣れを見せて、ますます柔らかかにカ리를包み込む。汗と先走りであちよぬちよ音立て、糸まで引いて勃起にご奉仕する。乳腺もホクホクと解れきって、迫り来る甘い絶頂感をひたすら待ちわびてしまっていた。

もはや誰から見ても、オッパイ責めでイってしまいそうな官能的すぎる豊満な美少女。その、肉感満点のバスの感触に。パイズリにも負けない柔らかで濃密な乳房摩擦に。少年の勃起性感もとうとう限界を迎えていた。

「もっもうダメだ！ イ、イっちやううっ！」

——びゅくくっっ！ ぐびゅっぐびゅびゅっっ！

初めて勃起で味わったオッパイ。びっくりするほど深く刺さってネットリとカ리를飲み込む乳肉。これらを責めながらイカされた少年は濃厚な樹液を乳房にぶちまける。もう最初の罪悪感なんて忘れてしまうほど快感だった。

そして同時に、朔耶もまた初めての雄のほとばしの迸りを浴びて乳房をぶるぶると震わせていた。

「ひあっつあ、ああああっつ……！ あ、熱い……おちんちん熱い……こ、これが、殿方の……！」

(す、すご、いいい……あ、熱いのが、ドロっとしたのがわたしの胸にいつ。でもこれ、し、沁み込むみたいで……やん、感じちゃうっ！)

まさか普通に夜伽よとぎをするより、先に胸を汚されてしまうなんて。胸だけで性の悦びを味わってしまうなんて。何だか信じられない気分で朔耶はへたりこんでしまっていた。

(うそ、みたいだ……わたし、こんなにも胸が敏感だったなんて。胸だけでこんなに気持ちよくなれるなんて。ああ、でも……刀磨殿も悦んでくれて……よかった)

大きすぎる胸を初めて褒めてくれた人。あんなにも本気で気遣ってくれた異性。そんな彼がきちんと自分で満足してくれたことに、朔耶は自分でも不思議なくらいな幸福感を味わっていた。

そして——どこかぼんやりとした表情、その淫らに蕩けた瞳で見下ろすと。乳房についた少年の樹液をそっと指で掬い取って。

「ああこれが、精液？ 白くって、ネバネバしていて、でも……はああん……」
——ちゅぷっ、ちゅるっ。

「つつつ!! さ、朔耶つつ!!」

何とそのまま口に含んで恍惚のため息を零してみせたのだ。思いもしなかった彼女の仕草に刀磨は驚いて喉を鳴らした。

けれど朔耶は、初めて味わう彼の味に不思議と酔いしれてしまっていた。

(はああ……ニガイ。でも、暖かいつ。どうして？ 刀磨殿のものだと思つと、頭、ぼく

つとして……)

指先を啜えてクチュクチュと残りを吸るたびに、濃厚な味が喉に沁みて胸に不思議なときめきが生まれる。決して美味ではないはずなのに、なぜか頭の芯まで痺れて下腹部がトクトクと甘やかに疼く。

不味いのに、素敵……そう思えてならない乙女は、どこか夢現ゆめうつの表情のまま、ウツトリと目を閉じてコクン、と精液を飲み干してしまふ。

(はああ、だめえ……お、美味しく、感じちゃうつ。は、胎はらが、熱くなつてきて……)

乳房を精液で汚されたというのに、唇まで舐めて甘い吐息を漏らす美少女。その、ゾクツとするほど妖艶な姿に、刀磨はたちまち勃起を回復させ心奪われてしまっていた。

「な、なんて、エッチなんだ。ぼ、僕、こんな朔耶見ると、また……」

健全な少年相手にこの痴態は刺激的すぎる。これまで抑えてきたものが音を立てて崩れていき、跪く彼女をそつと立たせて蕩けた瞳に訴えかけた。

「朔耶、僕、僕つ……もう我慢できそうにないんだ。朔耶見ると、一緒にいると、すぐくっ……え、エッチ、したくなつてっ」

「——え………？　そ………っそれは！　だ、ただだダメだ、ダメに決まっておろうっ？　ああ、わたしはっ、刀磨殿の弟子。師匠と、そこまでは……」

(そ、それだけはっ！　師匠である刀磨殿と、ねっ、ねんごろになんて——)
そう。朔耶にとつては、これはいまだに修行のお礼の延長上だった。そう思おうとして

いた。そうでなければ胸に募った熱い衝動に、何かが負けてしまいそうだったから。

（わ、わたしとて、刀磨殿のこと、気になって気になってわけが分からないのだった。それに、わたしたちはまだ学生の身分、まして師弟が、まっつまぐわうなどっく！！）

実のところ、想像するだけで下腹部が脈打ち股に湿り気を感じてしまう。むしろそれが恐く思えて。みんなの言うようなコトになるのがどうしようもなく恥ずかしくて。オッパイを抱く可憐な美少女はあと一步を強く躊躇っていた。

しかし——愛欲と恋慕で必死の表情と、未熟ゆえの一途さは、大いに迷う乙女のハートをきゅんっ！と心地よく射抜いていた。

「そんな、弟子って……僕、そんな立派な人間じゃない。朔耶見てるとどんどん惹かれてエッチなコトしてもらおうと興奮しちゃって。僕、キミのことずっとステキだと思ってた。師匠とか弟子とか関係なくって、さ、朔耶と、もつと、仲良く……！」

「あっ？ と、刀磨、殿っ……」

朔耶の痴態を目にした刀磨は、もう歯止めが利かなくなっていた。

（朔耶が、ほ、欲しい。こんなにキレイで、こんなにおっぱい大きくて、優しくて天然なクセに強がりな彼女をつっ！）

出会ってまだほんの数日。だが、剣士少年はわずかな間で彼女の魅力に心奪われていた。思わず手を伸ばして抱いた肩。暖かなそれは白くて肌もすべすべで、触れているだけで

もドキドキする。何より胸板に当たる生乳は、圧倒的なヴォリューム感で少年の性欲を萎えさせなかった。

「ああ、と、刀磨殿の……まだ、こんなに硬くて、あ、熱い……」

抱きすくめるほど密着すれば、むき出しの勃起も当然当たる。下腹部に触れる肉の感触に少女は戸惑う。

「ごめん、無茶苦茶だよ。がっかりしちゃうよね。でも僕、朔耶のこと、ほんとは……」
こちらを見上げてキラキラと光る、その瞳に向けて必死に訴える。きちんと最後まで言えないのは、こんな体験は初めてだからだ。

それでも、目は口ほどに物を言っている。抱き寄せられて驚く彼女を、その傾きかけている純なハートをさらに視線で刺激する。

やがて——揺れる瞳が俯くと、柔らかい掌がそつと男根に伸びてきて。

「そ……そう……だな。師匠をこんなにさせてしまったのだ。で、弟子として、このままというわけにはいくまい」

どこか観念にも似た表情で、朔耶はペニスを小さくなぞる。微細な快感を覚えながら刀磨は、いよいよよときが来たと感じた。

「さ、朔耶、いつ、いい？」

「し、仕方あるまい……元はといえばわたしの不徳。それに殿方はきちんと立てると母上も……い、言っておくが、今回だけだぞっ！ あくまで弟子としてであって、それに、と、

刀磨殿だからであつて、だなあ……！！」

必死に妙な言い訳をまくし立てアワアワと唇を波打たせる美少女。何だか刀磨は可愛く思えて、そつと、そおつと、彼女をベッドに横たえた。

「ぬ、脱がせても、いい？」

「う、うむ……よ、よよ、よしつ、来い！ おつ、女はつ、度胸つつ……あつ」

緊張しているのか、朔耶は言葉だけ強がつてみせる。乳首だけ両手で何とか隠し、頬はそつぽを向いているのが何とも初々しい感じ。それでも袴に手が伸びると、脱がされる予感にお尻が動いて確かな恥じらいも見せてくれた。

（可愛い、朔耶。袴まで新鮮に見えちゃう）

普段から慣れた衣装でさえもが、ベッドに横たわると清楚なスカートみたいに見えた。靴下ではなく素足がチラつくのも、普段気にならないのに今は色っぽく感じられる。

そして慣れた手つきで——自分のと同じだから——丁寧に脱がせていくと、何と中からは長く美しいおみ足と、意外にも可愛らしい純白のパンティが現れた。

（おお、ここはちゃんとした下着なんだ。フンドシとかかも、と思っただけど）

内心驚いた刀磨だったが、フンドシは本来、男モノの下着。さすがの朔耶も着る気にはならなかったのだろう。

ともあれパンティには光沢もあつてサラサラの質感がなかなか素敵。それを小声で、可愛いね、と褒めてあげると、朔耶は太腿を擦り合わせて、

「ああ嬉しいっ。イっちゃうんだね、イキそうなんだね朔耶っ！」

いよいよ本気になった刀磨は朔耶のフルーレも取って二刀流に。両手の指先で切っ先を摘むとスケスケの乳首に集中攻撃を敢行する。これには朔耶も驚かされて、とうとう腰までのたうたせながら快楽の涙を散らしていた。

「ひいん二本つついにゃああああんつつ!! ふう、二つなんてええ、先つば、どおじなんてええ、ひ、卑怯っ、卑怯らぞおとおまどのおおつつ！」

堪らず髪を振り乱す朔耶だが敏感乳房は正直そのもの。少年の小刻みな切っ先責めに少しも悦びを隠すことなく、ブラの紐を千切りそうなほどたつぶんたつぶんと盛大に揺れる。(ああ朔耶、いい顔してるっ。イキそうな顔っ！)

ぷにゅぷにゅ刺される乳肉を見下ろす、そのつぶらな瞳はすでに快感でトロントロン。眉間には縦シワが寄せられていて必死に絶頂を堪えてはいても、ぐっしよりと濡れた唇からは泡まで立てて唾液が溢れてしまっていた。

「ひあつくああっ！ もおらめええ、っ、突かれてえ、おっぱいブスブス刺されてええ、いく、いつ、イっちゃううっ！」

息も絶え絶えな今の朔耶は、もはや優しいイジめにもウツトリと高まる艶かしい女そのもの。胸の快楽に子宮も羨み太腿をクナクナと擦り合わせさせて、男根欲しさにお揃いのパンティまで思いきり露にしまっていた。

その官能的な姿に。何度も何度もブリッジを描いてガクガクとよがる豊満な肢体に。刀

磨の理性もみるみる溶かされ剣を持つ指も勢いを増す。

そして、少年の二刀流がトドメの一突きを乳首に決めると。

——つむむんっ、ツプむにゆりりっ！

「んきやうううんんんっくくくとおまどのおおんんっつ!!」

——びくん！ びくびくびくんっ！ ぷしゃっぷしゃっ！

一際甲高い嬌声と共に、下着も露な美少女剣士は、全身を跳ねさせて甘美な絶頂へと到達していた。

「はあっはあっ、とお、とおまどのおっ、ひくっ！ らめらっつて、言ったのにいい……っ！」
とうとうイカされた半裸の美少女は、ヒクヒクと絶頂感を噛み締めながら弱々しく非難する。達した直後のアへ顔も素敵で少年は微笑んで謝っていた。

「ごめんね。でも、おっぱいイジめられてイっちゃう朔耶、とつてもよかった……」

「うう……ば、ばかっ……」

「うん、ばかかも」

またムクれるところも微笑ましく、思わず顔を寄せてキス。思えばキスは二度目なのだが、朔耶は目を閉じて自然に唇を許してくれる。

「はむっ、ちゅっ、ちゅる……んはああ、とうま、どのお……んちゅっ」

「ちゅっ、くちゅっ……ああ朔耶……」

ここまでされた爆乳剣士は、舌が口内に入ってきて拒む様子も見せはしない。それど

ころか、入ってきた彼の舌を自分のそれと絡めて唾液の交換まで認めてくれた。

(ああ、朔耶のキス……ツバ……美味しいっ。汗みたいに甘酸っぱい気がする……)

いまだ告白こそしてないものの、やっていることはもう恋人同士の甘い一時。じっくりと愛撫して感じさせて、キスをしながら次のラブシーンを待っている。

そして、瑞々しい唇をしばらく味わわせてくれたところで。ぼーっとした表情の朔耶は、オズオズと勃起に触れると小声でおねだりしてくれた。

「……刀磨、どの……次は、わたしの中に……中を、突いてほしい……」

「うん、分かった」

力なく四肢を伸ばした姿さえ扇情的な今の彼女。その火照って緩んだ肢体を持ち上げると、少年は少女を四つんばいにさせていた。

「ああ、いや……こんな格好っ……」

「やっぱり恥ずかしい？ でも僕、朔耶の色んな姿、もっといっぱい見てみたいんだ」

我ながら大胆だとは思うものの、少年はすっかり彼女に心酔してしまっていた。美人でスタイルよくてオッパイが敏感でしかも健気。そんな女の子に抱いてと言われれば、何もかもを独占したくなるに決まっている。

(凄い。もうパンティがグショグショ。お漏らしみたいだっ)

刀磨は知らないが、先ほどいったとき朔耶は潮を噴いていたのだ。おかげでシースルーなパンティは、まるで役に立たないくらいに割れ目と陰毛を透けさせていた。

そんなお尻を支えてあげながらゆつくりと指を滑らせていき、スカートの中の大事な一枚をそっと下げて脱がせてあげる。次いで刀磨は、むき出しになったピンクの花弁に勃起をあてがって軽く焦らした。

「んあつ！ と、とうまどのおおつ……！」

「ああ、凄いぬるぬるっ。朔耶のおま○こ、ここだけでも気持ちいいよ」

「はああ、い、いやらしいっ。は、はや、くう……」

何と朔耶は四つんばいで、お尻まで振って誘ってくれる。カリに触れる淫唇までクチュクチュと鈴口を舐めてきてゾクつとさせる。

もう、これ以上我慢なんてできない。刀磨は淫欲の昂るまま、勢いよく勃起をラビアに突き立てていた。

——じゅぷりりっ！ ぐつちゅぐつちゅじゅっぶじゅっぶ！

「ひううっ!! ふああ待ってえ！ も、もおちよつと、ゆつくりいいっ！」

すぐにも始まったリズムよいピストンに少女は慄いて後ろを振り向く。けれど少年は尻肉を掴み、乙女の胎内でウットリと高まっていく。

「ごめんっ、でももう我慢できないよ！ 朔耶が魅力的すぎるし、おま○このお肉も柔らかいのにぎゅうぎゅう締めてくるうっっ！」

彼女の中はすでに蜜でいっぱいになっていてヌメリと吸い付きが半端ない。しかも膈内も待っていたのか、細やかなヒダたちは前よりとろとろに柔らかくなって一斉にペニスに

絡みついてくる。射精意欲も満タンなのにこれではゆっくり堪能などできず、腰は自然とガツガツ動いて彼女の中を擦り込んでいく。

「ひいっ！ ひあっ！ は、激しいのおっ、だめええっ！ おっ〜おま〇こ、よくつてえ……腕、立たないいい……！」

また少女も、散々待たされた濡れ膣肉を素早く擦られては堪らない。見る間に背筋が震え始めてガクリと肩を落としてしまうと、お尻だけ上げたいやらしい姿勢でラビアをリズムカルに愛されてしまう。

「あひっ！ あっあっああっ！ らあ、らめなのがいい、と、とおまどのがイクまで、わたし、もたないいい……っつ！」

それでも、健気で一途な剣士少女は、番の彼が果ててくれるまで必死に絶頂を耐えようとする。涙に濡れた頬を歪めて人差し指を小さく噛んで。でもそんな氣遣いさえ少年を熱く燃え上がらせて、勃起はますます硬度を上げて腰も激しく加速していく。

「朔耶っ、僕のために……ああ可愛いつ！ほんとに可愛いよ朔耶あっ！」
「そっそんなっ〜っひあああらめえええ!!」

——ばんばんばんばんじゅぶじゅぶふるちゆるちゆるちゅっ！

もう堪らなかつた。男がイクまで我慢するなんて献身的すぎて惚れ直さずにはいられない。肉づき豊かな白いお尻も愛蜜にまみれてエロティックだし、小さなシワのお尻の孔もヒクヒクしていて雄を自然と興奮させる。



制服の背中も大きくだわんで躍動感も素晴らしいし、長いポニーは床に広がり妖しげなつやさえ放って見える。おまけにヒップは前後に動き、自らペニスをラビアでしゃぶってくれている。

「はあつはあつ朔耶いいよっ！ おま○こグイグイきてるっ！ 狭くつてヌルヌルで、もう、もうっっ！」

「とおお、とおまどのおおつ、わ、わたしもお、わたしもおすぐううっっ！」

熱い後背位でよがる朔耶は、すっかり蕩けた乱れ顔でウツトリと尻肉を弾かれていく。自分も動き、懸命に男根を膣肉でシゴく。零れた舌から唾液が伝い、床に小さな水溜まりを作った。

自身の身体を預かるバストは、柔らかに潰れて両脇から溢れ出しまっている。大きいためか乳首まで見えて、床と挟まれてもちもちと捏ね回されていた。

「はああつっ凄いいっ。朔耶のナカつ、朔耶のおっぱいいっ！ つぶれちゃって、横からむにゅって、僕っ、堪んないっ……ぷちゅっ！」

「きやううんらめええおっぱいらめええっっ!!」

限界目の抽挿少年は後背位のまま首を伸ばし、溢れた横乳に濃厚な口付けをプレゼントしていた。キスマークがつくらいに、強くディープなオッパイへのキスを。

するとオッパイが弱い朔耶は思わずおとがいを反らしていた。イキそうなところへのオッパイキスは彼女にとつては気持ちよすぎたのだ。

途端、濡れに濡れた粒ヒダたちも、ペニスにきゅむむんっ！ と濃密な締め付けを返してくれて。

「うああし、締まるっくす、吸い付くっくしい、イクっつ！」

——ぶしゃああっ！ どばっどばっぶしゃっどぶしゃあっ！

「はあああつくるうううっつ!! ああ熱いのが、とおまどのの熱いのがあああっつ!!」
膣内で大きな水音が弾け怒涛の勢いで白濁が満ちた。いった女体のヒダヒダに搾られ少年の勃起もまた激しくイカされたのだ。

挿入してからはそんなに時間は経っていない。なのに刀磨はおろか、朔耶までもがすぐに絶頂を迎えてしまった。刀磨自身も驚いていたけれど、これは二人の身体の相性が抜群であるからこそだった。

おかげで刀磨は、またも避妊せず濃厚な樹液を注ぎ込んでしまっていた。

「はあ、はあ……ごめん朔耶。また、中に……」

「はあ、はあ……も、もう、今さらではないか……不埒、者お……っ」

少女は背中をヒクつかせながら非難めいたことを呟く。けれど経験浅い少年の目にさえ、本当に怒っているようには見えなかった。

そしてしばらくの後。朔耶は身を起こして結合を解くと、床に座り込む刀磨を覗き込み指先でツン、と鼻をつついた。

「まったく。本当に、いやらしい師匠なんだから。でも……」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)

特設サイトはこちらからアクセス!!

<http://ktcom.jp/harem/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※二次元ドリーム文庫とは異なり、美満の方が多いです。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



Valkyrie

<http://www.comic- Valkyrie.com/>

cranberry

<http://www.cran-berry.com/>

mille-feuille

<http://www.mille-feuille.jp/>

モバイル二次元ドリーム

<http://www.2d-dream.jp/>


KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!